

# KATE Newsletter

## 関東甲信越英語教育学会 編集委員会

No.117 March 10, 2023



宇都宮大学

### CONTENTS

#### [特集：関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会（オンライン）大会報告]

終わりは始まり バトンを埼玉研究大会へ 講演を視聴して	(研究大会実行委員長 田村岳充) ----- 2 (神村幸蔵) ----- 3
ワークショップ1を視聴して	(佐々木大和) ----- 4
ワークショップ2を視聴して	(伊東 賢) ----- 5
ワークショップ3を視聴して	(小木曾智子) ----- 6
茶話会に参加して	(櫻村祐志) ----- 7
研究発表・実践報告を行って	
その1 発表領域：スピーキング	(金子麻子) ----- 8
その2 発表領域：リーディング／文法	(物井真一) ----- 9
その3 発表領域：リーディング／文法	(山田敏幸) ----- 10
その4 発表領域：リーディング／文法	(高木哲也) ----- 11
その5 発表領域：教材・教科書／語彙・辞書・コーパス	(佐藤 選) ----- 12
その6 発表領域：早期英語教育・小学校／言語習得	(五十嵐美加) ----- 14
その7 発表領域：早期英語教育・小学校／言語習得	(酒井英樹) ----- 15
その8 発表領域：学習者／学習方略	(海老原貴司) ----- 16
その9 発表領域：動機づけ	(高橋 閑) ----- 17
その10 発表領域：カリキュラム	(増田瑞穂) ----- 18
参加受付部からのご報告	(加藤嘉津枝) ----- 19
第46回栃木研究大会（オンライン）プログラム、協賛・広告掲載企業一覧	----- 20

#### [全国英語教育学会 第47回北海道研究大会 授業研究フォーラム報告] ----- 21

#### [研究推進委員会報告] 第19回 出張！英語教育何でも読書会（報告：駒形知彦） ----- 23

#### [研修企画委員会報告] 月例研究会（6, 11月）・特別講演会（10月）

6月：ICTを活用した英語授業実践—同期型と非同期型の取り組み事例— (発表・報告：小林 翔先生) -----	24
10月：英語教育の“グッド・アンセスター”であるために（講演・報告：中島平三先生）	25
11月：リーディング能力向上を目指すナーサリー・ライムの活用（小学校での実践から） (発表・報告：細谷開世先生) -----	26

#### 関東甲信越英語教育学会日誌 ----- 27

#### 編集後記 ----- 28

## 特集：関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会（オンライン）大会報告

### 「終わりは始まり バトンを埼玉研究大会へ」

栃木研究大会（オンライン）実行委員長  
田村岳充（宇都宮大学）

関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会（オンライン）が、2022年12月10日（土）、11日（日）に開催され、ワークショップ3件、講演、茶話会をZoomを通してライブでお届けいたしました。自由研究発表・実践報告は42件で、オンデマンド形式で配信、Web上での質疑応答を行いました。参加者数は両日を合わせ、延べ306名（Zoom上の集計による）で、多数の会員・非会員の方々とともに2日間の日程を終えることができました。宇都宮大学には共催を、そして、栃木県教育委員会・宇都宮市教育委員会・栃木県小学校教育研究会外国語部会・栃木県中学校教育研究会英語部会・栃木県高等学校教育研究会英語部会に後援を、さらに、開隆堂出版、金星堂、くろしお出版、三省堂、新興出版社啓林館、大修館書店、東京書籍、能登印刷、英語運用能力評価協会、モリサワの計10社より協賛を受けることができました。この場を借りて、大会に関わる全ての皆さまに改めて厚く御礼申し上げます。

1日目のワークショップ1では、「英語教育における小中高の連携を進めるための栃木の取組—英語教育連携プログラム研修—」と題して、坂井英史先生（栃木県教育委員会）の進行のもと、君島浩二先生（栃木県那須塩原市立大原間小学校）、秋元映里先生（栃木県那須塩原市立東那須野中学校）、倉島郁乃先生（栃木県立那須拓陽高等学校）に、栃木県教育委員会の研修での取組をご紹介いただきました。その後、初めての試みとなる「オンライン茶話会」を行いました。森好紳先生（白鷗大学）による「リーディング」、廣森友人先生（明治大学）による「学習者要因(1) 情意・行動要因」、飯島睦美先生（群馬大学）による「学習者要因(2) 認知特性要因」の3つのテーマの部屋が設けられ、オンラインではありますが、温かな雰囲気のもとで参加者による双方向の語り合い、学び合いが行われました。

2日目のワークショップ2では、「単元構想を大切にしたい授業づくりのポイント—栃木県内の小中高の事例から—」と題して、小学校の実践を川又裕子先生（栃木県益子町立益子西小学校）に、中学校の実践を石井宗宏先生（栃木県那須塩原市教育委員会）に、高等学校の実践を大岡寿子先生（栃木県立のぞわ特別支援学校）にご発表いただきました。3つの実践のつながりや共通のポイントを大越武先生（栃木県真岡市立亀山小学校）が分かりやすくまとめてくださいました。続くワークショップ3では、「豊かなSmall Talkを授業で行うためのポイント—栃木県内の小中の事例から—」を掲げ、栗田寛之先生（栃木県宇都宮市教育委員会）のファシリテートのもと、小学校の取組を三島真由美先生（栃木県那須烏山市立荒川小学校）、中学校の取組を星野百合子先生（栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校）にご発表いただきました。いずれも、発表者による実際の授業の様子が映像で流される等、参加者にとって分かりやすい内容となっており、たいへん高い評価をいただきました。チーム栃木の取組が共有できたことを何よりも嬉しく思っております。

2日間の大会を締める最後のセッションとして、阿野幸一先生（文教大学）に「児童・生徒を育てる英語教員として成長していくために—教員研修と教員養成にかかわる立場から—」との演題でご講演をいただきました。学校現場での豊富なご経験、教員養成や教員研修に携わっている中で実際に見聞きされたことがらを伝えていただきながら、学習者にとって大切なことは何か、英語教育に携わる者全てにとって今後どのようなことが求められていくのかについて熱いメッセージを頂きました。阿野先生の思いや願いを大切に心に留めつつ、栃木研究大会の成果と課題を学会の皆さまと共有してまいります。最後に、チーム栃木を代表して皆さまへの心からの感謝を込めつつ、バトンを次年度再びオンラインで開催される埼玉研究大会につなぎたいと思います。本当にありがとうございました。

## ◇講演を視聴して◇

題目「児童・生徒を育てる英語教員として成長  
していくために—教員研修と教員養成に  
かかわる立場から—」

講演者：阿野幸一（文教大学）

報告者：神村幸蔵（筑波技術大学）

今回、文教大学教授の阿野幸一先生より、教員養成課程の学生指導を通して阿野先生がお感じになった問題意識を出発点として、現状の教員養成や研修の問題点、並びにそれに対する解決策のご提案についてお話を拝聴いたしました。

冒頭では、阿野先生の講義の受講生やゼミ生へのアンケートから明らかになった教育実習の実態についてご説明がありました。数多くの学生からの声を示しながら学生の実習校での体験を紹介なさっていたのですが、その中でも特に「英語が一言も聞こえてこない教室」というものが強く印象に残っています。というのも、教育実習の際、私の指導教員から「廊下に立っても英語の授業だと分からない授業（つまり、英語が聞こえてこない授業）はするな」という趣旨のご指導を頂いた経験があるからです。実際、その後私が勤めた中学校、高校の先生方も「英語で英語を」を実践されていたのを見て、それが現在の英語授業のスタンダードだと思っておりました。おそらく阿野先生のご指導されている学生も同様の思いでいたと思いますが、それだけに実習を通して覚えた「ガッカリ」感は深いものだったとご推察します。

次に、阿野先生がこれまでに取り組まれてきた教育現場での授業改善のご紹介へと話題が移りました。まず、「伝統的な」英語授業が行われていた県立高校に教員二人が転任したことがきっかけに始まった授業改善の事例や、子どもたちの英語にエラーが見られたときの対処法を改善していった中学教師のお話等を拝聴しました。阿野先生は、教員養成課程でこのような事例を紹介することで学生の意識に良い変化を与

えられるとおっしゃるとともに、学校現場では大学で学んだ新任教員との意見交換の場を設けて彼らの意見や考え方にも耳を傾けてほしい、とも言われていました。これは、大学で教員養成課程に従事しつつ、同時に実際の教育現場の指導改善に取り組まれていらっしゃる阿野先生だからこそその訴えであり、新任教師を受け入れる際に現場の教員が意識しなければならない新しい視点だと認識させられました。

阿野先生は他にも、作文へのフィードバック方法や各学校で作成されたはずだが使われていない「神棚 CAN・DO リスト」などの諸問題について、具体例を挙げつつそれに対する解決策をご提案されていました。その中でも特に、「間違っただけでいいから間違えないで書けることを書きなさい」という趣旨のライティング指導を受けた学生の話は、阿野先生ご自身も「衝撃的」とおっしゃっていたように、私の脳内に強い衝撃とともに記憶されています。言いたいことを書こうとしてリスクを取った生徒の評価をどのようにしていくかを検討すべきだという阿野先生のご提案は、ライティング力向上だけでなく生徒の主体性尊重の観点からも望ましいものだと感じました。

講演の終わりには、今後の教員養成や教員研修のあるべき姿について、阿野先生からいくつかご提案がありました。その内容は多岐にわたり、教員採用試験の難易度が高すぎることや模擬授業を実施しない自治体があること、検定教科書出版社と現場の教員間のコミュニケーションの機会が乏しいという問題、大学での英語授業においても小中高の英語指導とのつながりを意識した指導をすべきではといったご提案などがありました。挙げた話題はどれも「歯ごたえ」があり、今の私にはすべてを咀嚼するにはかなりの時間と労力が必要だと感じるばかりです。私は現在、教員養成や教員研修と直接関わる立場にはありませんが、今回の講演で阿野先生からうかがったことは、私が従事している英語教育という営みをより広い視点で見ると有

益なものだと感じております。

最後に、この度は貴重なお話をお聞かせくださった阿野幸一先生に、質疑応答の時間に私からの質問にお答えくださったことも併せて、この場を借りて御礼申し上げます。

## ◇ワークショップ1を視聴して◇

題目「英語教育における小中高の連携を進めるための栃木の取組—英語教育連携プログラム研修—」

司会者：坂井英史（栃木県教育委員会）

発表者：君島浩二

（栃木県那須塩原市立大原間小学校）

秋元映里

（栃木県那須塩原市立東那須野中学校）

倉島郁乃

（栃木県立那須拓陽高等学校）

報告者：佐々木大和（帝京大学）

ワークショップ1では、令和元年度から実施している「英語教育連携プログラム開発研修」の取り組みについてお話いただきました。

まず、栃木県教育委員会で指導主事を務める坂井先生から、研修の全体概要について説明がありました。今回の研修では特に「話すこと」の領域において小中高の連携を進め、「Small Talk」の考え方を活かし、伝え合う力の向上を目指した言語活動を各学校段階で発展的に実施する」ことを連携のポイントとして設定されたとのことでした。本研究大会のワークショップ3でも、Small Talkがテーマとして設定されていましたが、入試でのスピーキングテストの導入など、「話すこと」が近年の英語教育でのキーワードだと改めて感じました。

その後、研修に参加された小中高の先生方3名から実践事例を伺うことができました。まず、君島先生から小学校での実践事例のお話がありました。特に「英語を使って話すことがこの先何に役に立つのか児童と話し合う」というお話

が印象に残りました。私は大学の理工学部で一般英語を教えています。理工学部では、英語学習を大学でも継続する理由が見つからず、英語を勉強するモチベーションを持っていない学生が一定数います。こちらから一方的に英語を勉強する理由を与えるのではなく、話し合わせることも大切だと感じました。

次に、秋元先生から中学校での実践事例をお話いただきました。小学校でのペア活動の充実を踏まえて、中学校では、3人1組のスマーグルグループでのやり取りを帯活動で行われたようでした。生徒が英語でのやり取りを継続できるようになったり、伝えたいことを優先して英語を話せるようになってきたりと活動の成果も見られた一方、英語での「自然なやり取り」の難しさについてもお話しになっていました。この自然なやり取りの難しさは授業でSmall Talkを行っている私も日々感じており、共感しました。

最後に、倉島先生から高校での実践事例のご報告がありました。Small Talkを英語の発話に慣れるためだけでなく、発展的活動につなげる足場がけとしての活動としても利用されており、大変参考になりました。学生にライティングやスピーチをさせようと思っても、日本語でのメモの段階で何を書いたり、言ったら良いかわからずにつまづいてしまっている学生がいます。そのような学生たちにとって、クラスメートとのSmall Talkを通して、他の人の意見を参考にすることができるので、良い足場がけになるのだと思いました。

2020年度からの小学校での英語の必修化・教科化を踏まえて、今後、小中高での英語教育の連携はより重要になると改めて感じました。大学での必修英語の授業でも参考にしていきたいと思います。貴重なお話をありがとうございました。

## ◇ワークショップ2を視聴して◇

題目「単元構想を大切にした授業づくりのポイントー栃木県内の小中高の事例からー」

司会者：大越 武

(栃木県真岡市立亀山小学校)

発表者：川又裕子

(栃木県益子町立益子西小学校)

石井宗宏

(栃木県那須塩原市教育委員会)

大岡寿子

(栃木県立のぞわ特別支援学校)

報告者：伊東 賢 (茨城工業高等専門学校)

ワークショップ2では、最初に単元目標を設定し、そこから逆算して各授業の指導内容を考えるというバックワードの単元構想について、留意点を共有していただきました。

小学校における実践では、川又先生は、どんな子どもを育てたいかという視点から、英語力だけではなく人としての成長を重視されていました。単元のゴールは、楽しいだけではなく、外国語の授業だからこそ伝えられる内容を考えて、魅力的かつ学ぶ意味のあるものにします。単元構想の工夫として、ゴールを子どもと共有することが重要であるとのことでした。一回目の授業ではワクワク感を大切に、魅力的な教材を準備することで、子どもたちの早くやりたいという気持ちを引き出します。また、どのようなやり取りや発表ができるようになればよいのかというゴールを伝えて、インプットを十分に与えることに留意しています。

中学校における実践では、石井先生より「めあて」の設定の重要性についてお話をいただきました。自己紹介の活動では、ただ「自己紹介をしましょう」というだけでは不十分で、「印象に残る自己紹介をしましょう」という「めあて」を設定することで、発話される内容も変わってくるとのことでした。バックワードデザイ

ンが重要である理由として、教師が期待する生徒像を具体的にイメージすることで、必然的にそこに向けて何が 필요한かを考えるようになる点にあります。まず、単元末のゴールを設定し、次に必要なことを書き出し、それを各授業に割り当て、各授業のゴールを設定し、必要な活動を考え、そして活動の順序を考えるそうです。また、目標の達成には教師の支援が必要です。授業では、言語活動がドリル活動で終わっていないか、適切な「めあて」を設定できているか、単元の目標を意識した授業になっているかについて留意しています。

高校における実践では、大岡先生はBIG・MIDDLE・SMALLの3つのゴールを大切にされていました。BIGゴールは「英語の授業をとおして『考える・伝える・聞く・話し合う』力を育てること」です。特に「自分の意見を持つ」、「周囲の意見も尊重する」ことが主体的に話す姿勢につながる点を強調されていました。MIDDLEゴールは「単元ごとのゴール」のことです。「この題材で何を考えさせるのか」、「ゴール活動として何を設定するのか」を決めた後で、日々の授業で達成すべきSMALLゴールを設定します。生徒の安心感に配慮し、基本的に授業の流れは変えないのですが、ゴール活動はバリエーションを持たせています。また、ゴール活動を達成するための活動を日々の授業にこまめに取り入れ、毎日の授業の積み重ねが最後のゴール活動の達成につながることを生徒に伝えます。

バックワードの単元構想について、川又先生・石井先生・大岡先生、貴重な実践を共有してくださりありがとうございました。

## ◇ワークショップ3を視聴して◇

題目「豊かな Small Talk を授業で行うためのポイントー栃木県内の小中の事例からー」

司会者：栗田寛之

(栃木県宇都宮市教育委員会)

発表者：三島真由美

(栃木県那須烏山市立荒川小学校)

星野百合子

(栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校)

報告者：小木曾智子(富山大学)

Small Talk (以下 ST) とは、「既習表現を繰り返し使用し定着を図る」、「対話を続けるための基本表現の定着を図る」ことを目的に実施されます。ワークショップ3では、小・中学校の先生から、ST の実践や指導の留意点を共有していただきました。

まず、三島先生より、小学校の ST 指導で大切にしていることについて、「話題」と「やり取り」の観点から発表していただきました。ST では、①既習事項を取り上げ、学習内容にスムーズにつながる話題(例. 週末の出来事)、②児童の関心が高いタイムリーな話題(例. 学校行事)、③児童に身近で内容を想像できる話題(例. 給食、就寝時間)を扱う。そして、やり取りでは、①教師の例示から徐々に全体に話題を振る、②言語材料を実際に使ってみる練習・挑戦・相手を知る場としてペア活動を設定する、③英語での言い方がわからない表現は全体(児童に問いかけ→ALT)で確認することに留意されているそうです。

活動を始めた当初は内容がわからなかった児童や、指導がスムーズにできなかった教員も、繰り返し ST を行う中で会話を楽しむことができるようになってきたそうです。小学校での ST 指導では、諦めずに継続して指導すること、教員(専科教員、学級担任)の立場を活かして、充実した楽しい対話にすることが大切とのこと

でした。

続いて、星野先生からは、即興的なやり取りの土台としての、中学校での ST 指導についてご紹介いただきました。小学校から慣れ親しんできた ST に加え、プラスワン(情報をより詳しく)、クエスチョン(新情報を得る)、その場で考えて表現する(即興性を育てる)ことを意識されているそうです。そのため、間違いを恐れずに自己開示できる授業の雰囲気を作り、さまざまなペア・質問内容での即興的なやり取りを大事にされておられます。

中学校では、①生徒にとって身近な話題(誕生日、欲しいもの)、②タイムリーな話題(流行語)、③イベント(職場体験、将来の夢)、④日本文化(生活様式、縁起物)などの話題を扱い、話題について生徒自身と関連付けた一言を加えるよう指導されているそうです。即興性を重視し、正確性はさほど求めず、誤りはコミュニケーションを中断しない程度に訂正し、明示的な指導は最後に行います。

こうした ST の中で、「生徒に伝わらないもどかしさを経験させる」こと、実際のコミュニケーションに生きる方略や即興力をつけることが大切だそうです。今後は、即興性を重視した指導を継続しつつも、タブレットでの録音を活用し、英語の「質」「正確さ」にも目を向けていきたいとのことでした。

今回のワークショップに参加し、小中を通じた ST の話題、即興性の段階性、バリエーションについて勉強させていただくことができました。三島先生・星野先生、貴重な実践を共有していただきありがとうございました。

## ◇茶話会に参加して◇

題目「学習者要因（１）情意・行動要因」  
ファシリテーター：廣森友人（明治大学）  
報告者：樫村祐志（明治大学大学院生）

今年初めての試みで実施された茶話会の Room 2 では、学習者要因（特に情意・行動要因）をテーマとし、ファシリテーターである明治大学の廣森先生と共に、英語教育の実践・研究に関する日頃の疑問や関心について議論を行った。大学院生や現職の先生方、企業の方等、様々な背景を持つ合計 15 人程度が参加された。初めに氏名、所属、興味関心、参加の理由等を含む自己紹介を行った後、廣森先生からこれまでの第二言語習得におけるモチベーション研究に関して、概観が紹介された。

その後、複数の学習者要因と学習成果との関連をこれまでのメタ分析をもとに検討したところ、やはりモチベーション（＝やる気）は学習成果に対して大きな影響を持っていることが確認された。ただし、モチベーションが高いからといって必ずしも高い学習成果につながるとは限らないことから、モチベーションだけに注目するのでは不十分であり、近年ではエンゲージメント（＝実際の行動に焦点を当てたもの）に注目が集まっていることが紹介された。この概念には、主に行動的、感情的、認知的側面が含まれており、他にも社会的、主体的側面等も議論されることがあることを踏まえ、より学習者の学習を統合的な視点で捉えることができるものであった。さらに、モチベーション、エンゲージメント、学習成果の 3 要因の関連性を考える重要性も共有された。比較的新しい概念のため、参加者からは「なぜ behaviour ではなく engagement という用語を用いるのか」といった疑問が出ていた。

茶話会の中で話題に上がった学習者要因はモチベーションやエンゲージメントに留まらず、

学習不安・学習ストラテジー・アイデンティティ・エイジェンシー・自己効力感・言語適性等まで幅広く議論された。また、参加者が興味を抱いていた学習者は、小学生・中学生・高校生・大学生と様々であった。茶話会での議論を通して、学習者要因と一言でまとめても、実際にはそれぞれが異なる視点を持って言語学習の際の学習者要因を捉えていることが感じられた。最後に、この茶話会では、モチベーションやエンゲージメントをキーワードに、参加者全員の興味関心を関連させながら議論が進み、最近の研究動向と絡めながら考えることができるとても学び多い時間であった。



## ◇研究発表・実践報告を行って◇

### その1 発表領域：スピーキング

#### 題目『高校英語「論理・表現」に英語ディベート活動を取り入れる試み』

発表者・報告者：金子麻子

(お茶の水女子大学附属高等学校)

ディベート活動は、内容中心のコミュニケーション活動であり、生徒の英語スピーキング力だけでなく、批判的思考力や協働性を高めることにもつながると言われている。にもかかわらず、ベネッセ教育総合研究所(2016)の調査では、日々の授業の中でディベート活動を、「よく行う」「ときどき行う」とした教員がそれぞれ0.8%と4.5%で、高校の英語の授業にはいまだ積極的に行われていない。だが、ディベート活動に参加した生徒からは「楽しかった」「英語の力がのびた」などの感想が聞かれ、参加生徒の反応は大変ポジティブなものであった。このことから、ぜひより多くの先生方に授業にディベートを取り入れてもらいたいとの思いから、「英語表現 II」の授業で行ったディベート活動の実践を紹介する。

### 1. スモールステップで手順を確認

週1時間・全8回の授業を使いディベート活動を行った。初回にディベートとはどのような活動かを説明し、ディベート活動に取り組むことの意義を生徒たちに話し合わせた。第2~4回目は、ディベートの各段階(立論、反論、まとめ)の役割と注意点などを説明し、様々なトピック例を用いた段階ごとの練習(スピーキングのペア活動)を行った。ここまでの準備段階となる。スモールステップで指導していくため、生徒の感想には、「2学期の下積み時代(?)はあまり楽しくないな—と思っていたけど、3学期にそれを生かして楽しくディベートすることができたので、今考えると必要な時間だったんだな—と思いました!」といったものもあった。

ここで丁寧にそれぞれの段階の役割や注意すべき点を説明しておくことが、その後の質の高いディベートの実現につながる。

### 2. 自ら選んだトピックで実践

第5~7回目は、グループごとに分かれて実際にディベート活動を行った。ディベートのトピックは、生徒たちから募り、投票で4つのトピックを選定した。グループは4人1組となり、constructive argument(立論)、attack(反論)、defense(反論への反論)、summary(まとめ)の役割を分担した。ジャッジは設けなかった。第8回目を評価の対象とし、iPadで録画し、録画映像を後で教員が視聴し、評価した。また、ディベートで用いたトピックやストラテジーを利用してエッセイを書くというライティング活動も行った。最後に事後アンケートを実施し、生徒の反応を調べた。

2. 授業での取組  
第5~7回：実践

• be given the topic, assigned the side  
planning time: 5 min

• Constructive speech: 2 min  
thinking time: 4 min

• Attack speech: 2 min  
thinking time: 4 min

• Defense speech: 2 min  
thinking time: 4 min

• Summary speech: 2 min  
thinking time: 4 min

• reflection 振り返り: 3 min

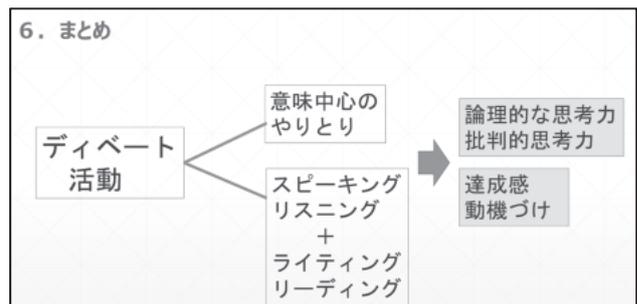
planning sheet

Topic: Ochotou should be co-ed. pro / con-

1. constructive argument	
2. attack on the opposition	
3. defense	
4. summary	

### 3. 「難しいけれど楽しかった!」

最終回までには、どのグループも論理的に自分たちの意見を主張し、相手の意見を踏まえたやりとりを行っており、ディベートが成立していた。豊富な語彙や表現が効果的に使用されており、意味中心のやり取りをするなかで、自分たちの意見を効果的に相手に伝えようとする工夫も見られた。アンケートの結果は、生徒たちはディベート活動は難しかったと感じながらも、



9割がディベート活動に取り組んでよかったと考え、8割がディベート活動を通して自分の英語力が伸びたと感じたを示した。生徒たちがディベート活動から得る達成感は非常に高く、高校の授業においてディベート活動に取り組む意義は大きいだろう。本活動は「英語表現 II」で取り組んだ活動だが、新学習指導要領のもとでは「論理・表現」で活用できると考える。

**その2 発表領域：リーディング/文法**

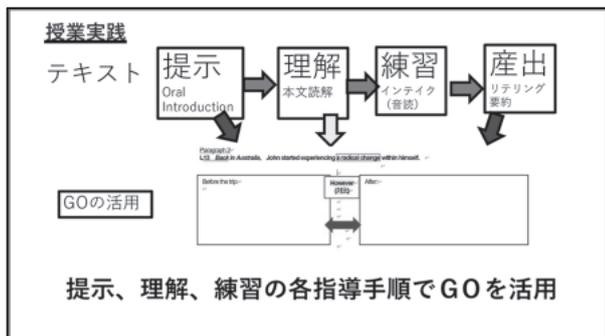
**題目「グラフィックオーガナイザーを用いた高校英語の授業実践—グラフィックオーガナイザーの有無が読後の記憶に与える影響について—**

**発表者・報告者：物井真一**

**(筑波大学附属高等学校)**

高校新学習指導要領では、「読むこと」について、書かれた内容を読み取るために適切な支援を活用することが述べられている。本実践では、読解指導における支援としてグラフィックオーガナイザー（GO）に改めて注目した。GOとは、英文の内容の論理的な関係を図表で二次元に示したものである。GOは学習者にとって内容理解や記憶の保持に効果的であると言われている。また、国語などの他教科や、小学生から大学生まで幅広く活用されている。

発表者の勤務校では、教科書の内容を中心としたオーラルイントロダクションから始まり、内容理解からリテリング等のアウトプット活動の指導手順を基本とする英語の授業を行っている。そこで、これらの各指導手順内でGOを



用した場合の読後の内容理解と記憶に対する効果を検証した。

高校3年生の2クラス（それぞれ37名）を対象とした。実験群では、新学期の最初の授業でGOについての講義と演習を行った。その後、授業ではオーラルイントロダクション、内容理解、リテリングの各指導手順で、空欄のあるGOを活用した。統制群では、事前のGOの指導と演習は行わず、実験群と同様の各指導手順で授業を進めたが特にGOを活用しなかった。教科書のとある1レッスン（説明文、Flesch-Kincaid Grade Level: 11.3, アイデアユニット数: 79）を終えた後に、実験群、統制群ともに読後テスト（英語による自由筆記再生、語彙問題、内容正誤問題）を実施した。

**結果(アンケート)**

Q. グラフィックオーガナイザーを活用した高校3年生の「コミュニケーション英語」の授業について、コメントがあれば書いてください。

- ✓ 読解もしかりだが、特にリテリングがしやすくなった
- ✓ 英文の要点が理解できてよかった
- ✓ 結構覚えていて実用性を感じます
- ✓ 重要な点とそうでない点がはっきりと理解できるようになったため、テスト勉強の時に内容を思い出しやすくなった
- ✓ 自分でグラフィックオーガナイザーの構成を作る機会がほしい
- ✓ 話の構成がわかりやすい
- ✓ 高1、2の授業と比較して、英文を最初から具体的に読むのではなく、一歩引いてまず全体を捉えようとして読むことができた
- ✓ 正直グラフィックオーガナイザーというものだとこの図を理解しておらず、あんまり意識していなかったが、確かにこれのおかげで理解しやすかった

語彙問題、正誤問題については、統計的な有意差が確認されなかった。一方で、自由筆記再生で産出されたアイデアユニットについては、実験群では平均5.4個、統制群では平均3.7個確認され、統計的な有意差が確認された。新学習指導要領を振り返ってみると、高校3年生であれば、支援をほとんど活用しなくても書かれた内容を読み取ることができるようになることを目的としている。本実践でも、本文に関する語彙や内容理解について、読解の支援としてGOを特に必要としていないようであった。一方で、自由筆記再生から、高校3年生であってもGOを活用すると、読後の記憶に一定の効果があると考えられる。

実験群の生徒は、事前指導を含めたGOの明示的な指導を受けたのは初めてであった。アン

ケート結果からも、GO を概ね好意的に捉えており、「全体の意味」や「話の流れ」を理解しやすくなった、リテリング活動を行いやすくなった、と述べていた。今後は、本実践で行った事前指導を含む GO を活用した英語の授業を高校 1 年生から行い、高校英語における支援について引き続き調査研究を進めていきたい。

最後に、本研究大会で実践発表する機会を頂けたことは、これまでの実践を振り返る貴重な機会となりました。心より感謝いたします。

**その3 発表領域：リーディング／文法**  
**題目「日本人英語学習者にとって苦手な文法項目の解明—効果的で効率的な英語指導・学習を目指して—」**  
**発表者・報告者：山田敏幸（群馬大学）**

本研究の目的は、日本の学校英語教育の限られた授業時間の中で、より効率的で効果的な英語指導・学習を実現するために、日本人英語学習者が苦手な英語文法項目を解明し、重点的に指導・学習すべき文法項目を明らかにすることでした。研究対象を大学生（かつ比較的習熟度が低い学習者）にした理由は、小中高と学習してもなお苦手な文法項目を解明し、小中高で重点的に扱うべき項目を明らかにすることによって、学校英語教育の限られた授業時間における効果的で効率的な指導・学習の土台を形成することができると考えられるからです。

発表では、日本人英語学習者の文法項目習得（難易度）順序に関する先行研究を整理した上で、本研究が実施した大学生対象の自由英作文

4. 自由英作文課題 4.1. 方法	
方法	
▶ 参加者	71名の大学生で低習熟度の日本人英語学習者 (TOEIC平均点340; CEFR B1相当)
▶ 材料	自由英作文課題25回分のトピック (例: <i>What did you do during the summer vacation?</i> )
▶ 手続き	自由英作文課題 (授業英語1年間をかけたの宿題として実施) 1トピック150語程度で、辞書を使わず、文法的誤りを気にしないように指示
▶ データ分析	36種類の形態統語項目における誤りを同定し、誤り数の分布を分析

課題による新たな文法的誤りデータによって、日本人英語学習者の苦手な文法項目の同定を試みました。

主要な結果は以下のスライドのように提示しました。

4. 自由英作文課題 4.2. 結果			
結果			
▶ 分析			
形態統語項目	誤り数 (全体での割合)	参考: 横田・白畑 (2021)	
<b>誤り数100個以上</b>			
限定詞	8 2 8 (35.37%)	限定詞	難易度11/12
名詞句内数一致	3 5 2 (15.04%)	cf. 複数形	難易度10/12
前置詞	2 9 8 (12.73%)		
<b>誤り数100個以下</b>			
主語動詞一致	8 9 (3.80%)	cf. 3 単現-s	難易度3/12
動詞	7 2 (3.08%)	cf. 動詞の低位範疇化	難易度12/12
語順	6 8 (2.90%)	語順	5/12
時制	6 4 (2.73%)	cf. 過去形	6/12
代名詞	4 1 (1.75%)	cf. 代名詞の用法	8/12
助動詞	3 8 (1.62%)	助動詞	2/12
進行形	1 2 (0.51%)	cf. 現在進行形	4/12
Wh (間接) 疑問文	4 (0.17%)	cf. Wh疑問文	7/12

横田・白畑 (2021) の研究 (12/12 は 12 項目中 12 番目に習得が難しい項目を表す) と照らし合わせた結果、先行研究と同様、母語の日本語に対応する文法項目がない場合、習得が難しいことがわかりました。具体的には、大学生になってもなお、限定詞や名詞句内数一致に誤りが多く観察されました。他方、先行研究での難易度とは異なる、誤りの分布も観察されました。

本研究の発見は主に 3 つであり、まず先行研究どおり日本人英語学習者にとっての英語文法項目習得難易度順序があること、次に誤りの分布は文法項目毎に異なること、最後に誤りの少ない安定的に習得されている文法項目と誤りの多い安定的に習得されていない文法項目があることです。理論的な示唆として、日本人英語学習者の英語文法項目習得難易度順序という現象に対して、母語と目標言語との間の関係性、特に母語にない文法項目の習得が難しいとする従来の説明に加え、それでは説明が難しい文法項目もあることがわかりました。この事実は、第二言語学習者の文法的誤りは、母語と目標言語という二元論的な説明を超えて、人間言語一般の特性から説明されるべきものであることを意味していると考えられます。実践的示唆として、大学生になってもなお、誤りの多い文法項目が

あるという事実は、小中高において重点的に指導・学習すべき項目があることを意味し、教育現場における文法指導に新たな視点を与えてくれます。すなわち、指導をあまり要さない文法項目と、十分な指導時間によって重点的な指導を要すべき文法項目に分けて、緩急をつけた指導・学習の実現を目指すことができます。このような指導と学習の分業が、効率的で効果的な英語指導・学習を導いてくれると考えられます。

今回の発表に対して、たいへん有意義で建設的なご意見を頂くことができました。コメントをいただきました先生方に深く感謝申し上げます。主に実践への応用有効性について今後のご示唆を頂きました。頂いたご意見を基に、今後も基礎研究を続け、日本のより良き英語教育のために理論と実践の往還を図れるよう、研究成果を実践に応用できるレベルにまで昇華させていきたいと思えます。

#### 引用文献

横田秀樹・白畑知彦. (2021) 「大学生の英文法習得難易度順序の調査」『中部地区英語教育学会紀要』第 50 巻, 251–258.

#### その4 発表領域：リーディング／文法 題目『「時制」の習熟を目指したディクトグロス の実践—Google Docs を活用した筆記ラ ンゲージングの促進的役割—』

発表者・報告者：高木哲也

(筑波大学附属高等学校)

第二言語習得の研究分野では、思考している内容を言語化することをランゲージングと呼び、Swain (2006) 以降、特に言語面の正確性に対する学習効果が報告されている (Suzuki, 2012, 2017, 2019; Swain et al., 2009)。

#### 筆記ランゲージング (written languaging) とは

- 「外国語学習者が疑問や問題に感じたことを書いて理解を深めるプロセス」(石川・鈴木, 2022)』
- 実証研究が近年増加 (Ishikawa, 2018; Fukuta et al., 2019; Niu & You, 2020; Pourdana et al., 2021; Keshanchi et al., 2022)
- 実践報告は豊富ではない (西本, 2022a; 西本, 2022b)
- 主に正確性の観点で効果があると示唆 (Suzuki, 2009; Suzuki & Itagaki, 2009; Suzuki, 2012; Ishikawa, 2015; Yilmaz, 2016; Moradan et al., 2020)
- 近年、ICTを活用した実証研究が報告され始めている(e.g. Kazemi et al., 2022; Falasiri, 2021)が、ディクトグロスにおける実践報告はない

ランゲージングは口頭ランゲージングと筆記ランゲージング (written languaging; 以降, WL) の形態を有する (Suzuki, 2012)。石川・鈴木 (2022) は WL を「外国語学習者が疑問や問題に感じたことを書いて理解を深めるプロセス」と定義している。国内外において WL 研究は着実に増えている (Niu & Li, 2017; Suzuki & Storch, 2021)。近年 ICT を活用した WL 研究も報告され始めているが、ディクトグロスと共に実施したものは報告されていない。また、中高の指導現場における実践研究はほとんどなく、教室現場の知見を蓄積することが期待される。

本実践では、高校の英語授業内で「時制」の習熟を目指したディクトグロスを 3 回実施した。生徒は Google ドキュメントを使用して、再構築した英文に対して互いにコメントを与え合う活動を行った。本実践における「Google ドキュメント内でコメントを記述する行為」を WL と定義した。3 回の活動の前に「時制に関する」

プレテスト（記述式 36 題）を実施し、活動後に直後テスト、また約 1 か月半後に遅延テストを同一問題で実施し、分析対象の生徒 59 名の正答数の差を統計的に分析した。また、プレテストから遅延テストにかけて伸長度の大きかった生徒 8 名が与えた、または受け取った筆記ランゲージング・エピソード (written languaging episodes; 以降, WLE) の内容を質的に分析した。



結果、「時制に関する」テストの正答数は、プレテストから直後テストにかけて、およびプレテストから遅延テストにかけて統計的に有意に向上したことが示された。興味深いことに、約 1 ヶ月半後に実施した遅延テストにおいても学習効果が保持されたことが示された。伸長度の大きかった生徒 8 名の WLE は「時制に関する」ものが多く、特に現在形・過去形・未来を表す表現について記述されていた。これは 3 回のテストにおいて特に正答率が向上した項目と重なることが確認されたため、「時制に関する WLE」を多く産出するほど、「時制」の習熟が促されたことが示唆された。

発表を視聴していただいた方より質問を頂き、研究内容を振り返る良い機会となった。また、他の発表からも研究手法や実践内容はもちろん、受け手にとってわかりやすい資料や発表方法についても学ぶことができた。日々の授業でランゲージングを効果的に取り入れる方策を求めながら、今後も授業実践を行ってまいりたい。

その5 発表領域：教材・教科書／語彙・辞書・コーパス

題目『「論理・表現」におけるディスコースマーカの扱いと指導に関する検討』

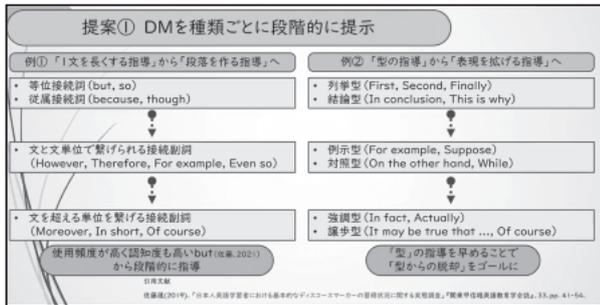
発表者・報告者：佐藤 選（東京学芸大学）

学習指導要領において「論理的に考える力」「論理的に表現する力」が重視されることに伴い新設された高校英語科目「論理・表現」において、「論理」を表現するディスコースマーカ（以下, DM）を活用したライティング・スピーキングの指導が有用であると考えられます。本発表では、現行の「論理・表現 I」の教科書で DM がどのように取り扱われているかの実態調査の結果を提示し、そこから考えられる指導上の問題点を検討いたしました。

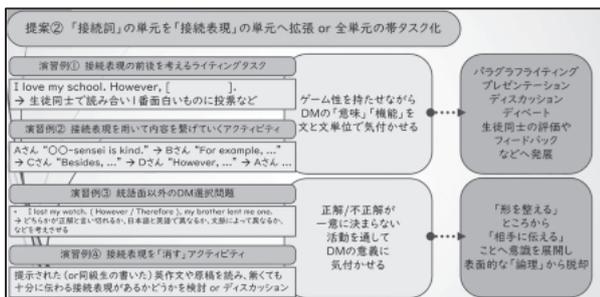
今回発表いたしました調査結果の結論として、大きく 2 つの課題を提示いたしました。「『型』の提示への偏重」および「DM の『提示』から先の展開の欠如」です。前者については、パラグラフやプレゼンの構成例は教科書で提示されているものの、特定の「型」の提示に終始しており、相手に伝えるために効果的な型の工夫についての説明や活動は盛り込まれていないこと、また英語母語話者があまり使用しない DM を過剰使用させる可能性の高い「型」が多く提示されていることが課題として挙げられました。後者については、教科書で「接続詞」を演習する箇所と DM の提示箇所に関連性がほとんど認められないことや、DM を使った方が良い場面・使わない方が良い場面といった区別をつけさせる活動は盛り込まれていないことが課題として挙げられました。

上記の調査結果に基づいて、本発表では DM を活用した指導およびタスク・アクティビティの例として、以下の 2 つの方法を提案いたしました。1 つは、DM を段階的に提示することで、学習者に馴染みのあるものから導入したり、「型からの脱却」をゴールにしたりする方法で

す。



2つ目には、「接続詞」の単元を「接続表現」の単元へと拡張させ、品詞に拠らず幅広い表現を扱う演習例を提案いたしました。



参加者の皆さまとは、DM を活用した指導の難しさや生徒から頻出するミスの実態などを詳しく共有することができました。例えば、because などの中学校で学習する基本表現の使い方に関するミスが目立つ、DM を付けることで却って不自然になっている場合の指導が難しい、といった内容について、情報交換をさせていただきました。主要な文法ターゲットに設定されていない分、指導法やタスク・アクティビティの種類が十分に検討されていない点が DM を活用した指導の課題であることを改めて強く認識するに至りました。コメント・質問を頂きました参加者の皆さまに、この場をお借りして感謝申し上げます。



その6 発表領域：早期英語教育・小学校／言語習得

題目「文の組み立て・あいまい性に着目した授業実践の効果検証—児童のメタ言語能力向上を目指して—」

発表者・報告者：五十嵐美加

(こども教育宝仙大学)

今回「文の組み立て・あいまい性に着目した授業実践の効果検証—児童のメタ言語能力向上を目指して—」というテーマで研究発表させていただきました。なお「メタ言語能力」とは、言語そのものの構造や機能について意識をめぐらせることができる能力のことです。メタ言語能力が外国語習熟度に正の影響を与えるということは先行研究で明らかになっていますが、学校現場におけるメタ言語能力育成の具体的な方法やその効果に関する知見はまだ多くはありません。そこで本研究では「学習動機づけ」と「学習に対する信念」という、学習過程に大きく関与すると考えられる変数を含めて、メタ言語能力育成を目的とした授業の効果を検証しました。

調査には関西の公立小学校6年生(66名)に参加してもらいました。介入授業は主に語順・文の構造・あいまい性を扱う内容で5回×45分、調査協力校の英語・国語担当の先生に実施していただきました(調査協力校の都合により動機づけ・信念に関する事前調査は全参加者の約半数のみ参加)。

方法  
調査項目

① メタ言語能力テスト(日本語の仕組みと働きに関するクイズ)

a. 文分節課題(1つの文を2つの文に分けて書く問題、2点×6問=12点満点)

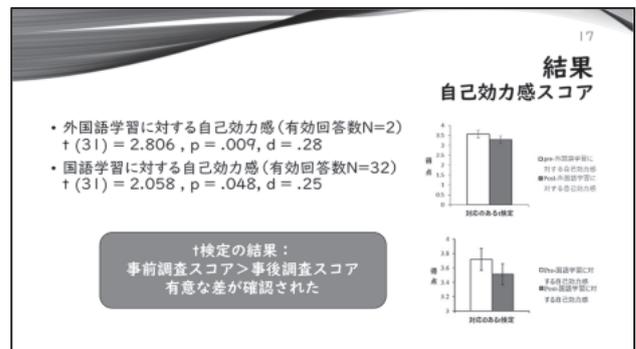
- 例) 昨日弟が作ったケーキは美味しかった。
- 解答例: 昨日弟がケーキを作った。
- (その)ケーキは美味しかった。

b. あいまい性判断課題(二つの意味を考える問題、2点×6問=12点満点)

- 例) マサキはカッコいいスーツを着た山田先生を見た。
- 解答例: スーツがカッコいい、山田先生がカッコいい

調査画面(Google Form)

事前・事後の比較の結果、信念については有意な変化は見られなかったものの、メタ言語能力テストについては有意なスコアの上昇が見られました。



一方、動機づけ関連変数のうち、言語学習に対する自己効力感については有意なスコアの低下が確認されました。メタ言語能力テストスコアの上昇が見られたことから、今回の授業は児童のメタ言語能力向上に寄与するという示唆が得られた一方、自己効力感には負の影響を与えるということが示唆されました。今回の介入授業では「ことばの奥深さ」を知るという狙いもあったため、それまでの授業内容よりも難易度が高い課題に取り組むことになり、結果的に児童たちが国語や英語に対して「難しい」という印象を抱いてしまった可能性があります。今後は難易度を調整することにより、動機づけや信念に対しても正の影響を期待できる授業内容を検討していく必要があります。

参加者の方々からは自己効力感に関する結果に対して、有効性の認知を上げるための工夫の必要性やメタ言語能力測定方法の改善(例えば、対象者の発達段階に応じて、筆記試験ではなく、絵を選択するといった子どもが楽しんで取り組める課題にするなど)に関する貴重なフィードバックを頂きました。ご意見をくださった先生方、どうもありがとうございました。

最後に、本大会開催に向けて尽力くださった全ての方々には感謝いたします。特に大会事務局の方々には大変お世話になりました。重ねてお礼申し上げます。

その7 発表領域：早期英語教育・小学校／言語習得

題目「小学校学習指導要領全面実施後の児童の英語力及び意識の変容」

発表者：酒井英樹（信州大学）

福本優美子

（ベネッセ教育総合研究所）

森下みゆき

（ベネッセ教育総合研究所）

加藤由美子

（ベネッセ教育総合研究所）

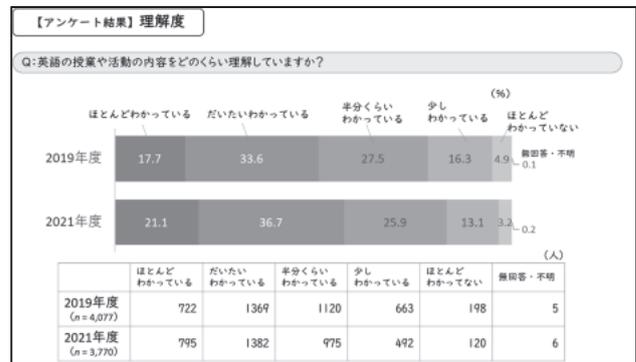
報告者：酒井英樹（信州大学）

2017年に小学校学習指導要領が告示され2年間の移行期間を経て、2020年度から中学年で外国語活動、高学年では外国語科が実施されています。この間に児童の英語力及び意識がどのように変容したのかを探るため、移行期（年間50単位時間）の小学6年生（2019年度）と全面実施後（年間70単位時間）の小学6年生（2021年度）とを比較し、その結果について発表しました。本研究では、スコア型4技能テスト（GTEC Junior2）を実施し、2019年度と2021年度の両方に参加した61校（2019年度4,077名、2021年度3,770名）を対象に、テストと同時に実施したアンケートとあわせて分析しました。

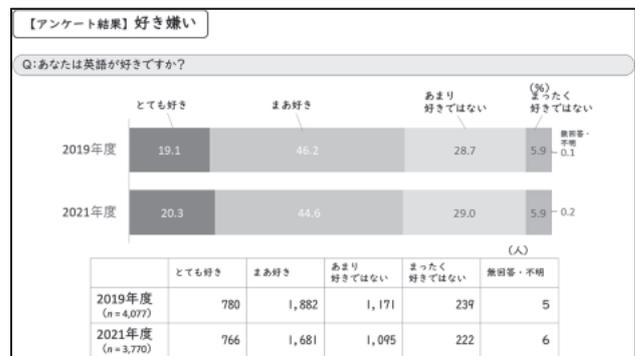
英語力は、2019年度小学6年生のトータルスコアは349.2点、2021年度小学6年生は385.6点に、グレードも3から4に上がっていました。技能別に見ると、2019年度に他の技能よりも高かった聞く力は2021年度も変わらずグレード4を維持、読む力・話す力・書く力は、グレード3から4へと高くなり、総合的な力の育成が図られていることが示されました。

児童の意識に関しては、英語の授業や活動の内容に対する理解度を尋ねる設問で「ほとんどわかっている」や「だいたいわかっている」という回答が増え（50.8% → 57.7%）、統計的にも

有意な差が見られました。また、英語の授業や活動の時間を「楽しい」（とても＋まあ）という回答は変わらず8割台でした。



さらに、英語の好き嫌いについては、「好き」（とても＋まあ）と肯定する回答は6割台と変化はなく、英語嫌いも増加していないことが示されました。その他には、授業でもっとやってみたいこと、授業を通して思うようになったこと、校外学習、つきたい英語力などについても聞いていますが大きな変化は見られませんでした。



本研究から、移行期間と比較して全面実施後の小学6年生の英語力に伸長が見られました。この伸びの理由の一つの可能性としては、時数の増加を挙げることができます。二つ目の可能性としては、全面実施後においては教科書を用いて外国語を学習した児童たちであったという点が挙げられます。新しく制作された教科書では単元と単元の体系的があり、5領域のバランスが図られていることが児童のわかりやすさや授業の理解度の高まりにもつながったと考えられます。

今回は対象校の全体的な変容を見て報告をしましたが、今後の課題としては教育委員会調査及び学校調査と紐付けて時数の増加および教科書の使用以外の要因についても詳細な分析を継続していきたいと考えています。

**その8 発表領域：学習者／学習方略**  
**題目「語彙学習方略指導の実践と効果の検証—個人差要因を考慮に入れて—」**  
**発表者・報告者：海老原貴司**  
**(獨協大学大学院研究生)**

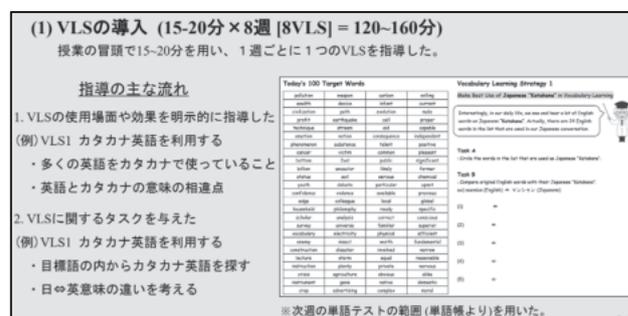
「先生、英単語が覚えられません。どうやって勉強すればいいですか？」と生徒に聞かれたことはありませんか。私はその度に自分の学習経験をもとに助言を与えていました。ただ、私の方法がこの生徒に本当に効果的なのか自信を持っていませんでした。もちろん、英単語学習に魔法の方法はありませんし、最終的には学習者自身が選択していく必要があります。ただ、せっかく助けを求めてくれた生徒たちに一人の教師として力になりたかったのです。この経験を機に語彙学習方略 (vocabulary learning strategy [VLS]) に興味を持ち、学ぶようになりました。今回の研究発表では、実際に VLS を生徒に教えてみて、彼らの語彙学習法がどのように変化したのかを報告しました。

**指導した8種類のVLS**  
 事前調査の結果より「生徒が効果的だと思っているが、使用頻度が少ないもの」を指導に選んだ。

VLSタイプ	内容、タイミングと目的
1. カタカナ英語を利用する	まずは日本語で使われている英単語を探してみる。
2. キーワード法を利用する	音を聞いて意味を思い出すように、語彙を作ってみる。
3. カテゴリー別に覚える	脳内で意味マップを作るために、単語をグループ化する。 (例) 分野別、ワードファミリー
4. ワードパーツから推測する	綴りを見て意味を思い出すように、接辞や語幹について学んだり、推測の練習をする。
5. フレーズと一緒に覚える	フレーズやコロケーションなどを通して、目標語を記憶する。
6. 同義語・反意語と結びつける	既に学んだ単語で、同じ・反対の意味の単語と目標語を結びつける。
7. 文脈から推測する	未知語に出会ったときに、文脈から未知語の意味を推測する。
8. コアイメージを利用する	目標語が多義的な場合、中心の(共通の)意味を考える。

高校2学年の3クラスに、授業内で8種類のVLSを指導しました。その事前・事後において、7件法の質問紙を用いて各VLSの使用頻度を量的データとして収集し、分析にかけました。加

えて、個人差の動機付けと学習観をもとに参加者をタイプ別に分類し、各々のグループがどのVLSを好んで使用し、指導の前後にその使用がどのように変化したのかを確認しました。



「今日から先生おすすめの英単語学習法を教えていくよ！」と3か月間のVLS指導の口火を切りました。私自身、この類の指導を受けた経験がないので、上手くできるか不安もありましたが、意外と生徒たちは楽しそうにしていました。特にカタカナ語や語源を利用したVLSは人気がありました。例えば、カタカナ語で使われている英単語を目標語リストから探し出す活動の際には、友達と賑やかに取り組んでいました。また、日英の単語の違いを比較する際には、apartment と mansion という単語をグーグルで画像検索をしてもらおうと、その違いに驚いた様子が見られました。これはVLS指導が上手くいっているのではと期待していました。

ところが、蓋を開けてみたら、指導の前後で学習法の変化に有意な差が見られませんでした。生徒を個人差で群分けした場合でも同様の結果です。

では、どのように生徒たちが単語学習をしていたかという、その答えは「何度も書く」です。確かに、書くことは大切ですが、それだけで高校レベルの膨大な語彙を習得できるでしょうか。教科書にマーカーを引くことと同じように、書くだけで学習に満足していないでしょうか。

生徒の学習法がどんな要因に影響を受け、形成されたのか気になるところです。学習経験、普段のテスト形式、方略の費用対効果など様々

な要因が考えられます。今後は生徒の学習法の変化を具体的に記述するような研究に取り組みたいです。

最後に、このような貴重な発表の機会を与えてくださった企画・運営の皆さま、本研究発表をご覧頂いた先生方に御礼を申し上げます。

### その9 発表領域：動機づけ

題目「L2 動機づけ自己システム理論とその応用—先行研究に基づく今後の研究・実践への展望—」

発表者・報告者：高橋 閑

(清泉女子大学大学院生)

まず初めに、この度、関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会という貴重な場において、自由研究発表の機会をくださり、誠に有難うございました。また、私の発表に対して、有意義なフィードバックをくださった先生方に心より感謝申し上げます。

本発表においては、英語学習動機づけにおけるL2動機づけ自己システム理論とその応用に関して、日本国内で実施、日本人大学生を対象とした先行研究を検討し、今後の研究の方向性を示しました。L2動機づけ自己システム理論は、2000年代にZoltán Dörnyei氏により、自己概念に注目しつつ、これまでの言語学習動機づけの研究の考えを引き継いで提唱されました。

今回の先行研究の検討・考察では、英語学習動機づけにおけるL2動機づけ自己システム理論の応用に関して、L2動機づけ自己システム理論を構成する3要素（「L2理想自己」、「L2義

務自己」、「L2学習経験」）のうち将来の自己像を表す「L2理想自己」ならびに「L2義務自己」と英語学習動機づけとの関係性に注目して発表させていただきました。具体的には、L2動機づけ自己システム理論に基づいたL2動機づけ研究を、横断的研究と縦断的研究の分類をベースに「横断的研究：L2理想自己の形成」、「横断的研究：L2理想自己と動機づけの関係」、「横断的研究：L2理想自己とL2義務自己の関係」、「縦断的研究」という4つの観点に分け、検討・考察しました。

その結果、横断的研究においては、L2理想自己を鮮明に持つこと、また、L2理想自己とL2義務自己の両方を持つことが、L2動機づけの向上につながりうるということが明らかになりました。一方で、縦断的研究においては、L2理想自己の変化を見ることが、L2動機づけの変容の解明に結びつくということが示されたものの、このような縦断的研究の殆どにおいては、L2学習者のL2動機づけの詳細なプロセスが依然として不明瞭であるということが浮き彫りとなったということが示唆されました。

今後のL2動機づけ研究として、詳細なL2動機づけのプロセスの解明が挙げられるという方向性に至ったことを示したことにより、現在の日本の教育現場において、どのように学習者を動機づけ、それを維持するかという根本的な問いの解明に繋がることを期待されました。

## 5. 今後の研究の方向性

個人個人の視点から実施された研究は限定的であることから、L2学習者のL2動機づけの個人のプロセスが依然として不明瞭である。



個人個人の学習者の動機づけのプロセスを明らかにすることが、現在の日本の教育現場での、いかに学習者を動機づけるか、つまりやる気を起こしそれを維持するかという実践的な課題に応えることにつながる。

### Zoltán Dörnyei のL2動機づけ自己システム(L2MSS)理論

#### •L2理想自己

- L2を使って、将来どういった自分になりたいかという学習者の理想の自己像(なりたい自分)。

#### •L2義務自己

- L2を使って、将来どういった自分になるべきかという学習者の自己像(なるべき自分)。

#### •L2学習経験

- 学習者の「現在実際に学ぶ学習環境」と「それまでの学習経験」を指したもの。

(阿川, 2021b; Dörnyei et al., 2009; 橋本, 2021; 入江, 2008; 金井, 2017; 鈴木他, 2010; Yashima et al., 20

その10 発表領域：カリキュラム

題目「中学校学習指導要領改善のための一提案  
—高校入試問題を分析して—」

発表者：増田瑞穂（新潟大学）

松沢伸二（新潟大学）

報告者：増田瑞穂（新潟大学）

栃木研究大会では、昨年実施された全国公立高等学校入試問題を含む過去10年の同入試問題を分析した研究を発表し、次期中学校学習指導要領への提案をしました。『ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）』でコミュニケーション言語活動の1つとされているメディアーション活動（資料1）に焦点をあて、入試での日本語で解答を求める問題（メディアーション問題）を分析しました。

【資料1】

**(参考)メディアーション活動とは**

■ メディアーション活動とは、相手のために言語を調整してメッセージを伝える活動である。自分のために言語を調整する場合もある(例：講義中にメモを取る)。コミュニケーション能力の構成要素の1つであり、CEFR(2020)は具体的なメディアーション活動を示している(左図)。

■ 太枠のメディアーション活動は、言語の切り替え(A言語⇔B言語)を含む活動である。

1. Relaying specific information: A言語の情報を目を通し、相手に必要な特定の情報をB言語で伝える。
2. Explaining data: A言語で提示・説明されている図表等のデータを、B言語で説明する。
3. Processing text: A言語の原文を十分に理解した上で、B言語で要点をまとめる・要約をする。
4. Translating a written text: A言語の原文をB言語に訳す。
5. Acting as intermediary: インフォーマルな場面において、互いの言語が理解できない話者のために、仲介者としての役割を担う。

(Council of Europe, 2020, p. 90)  
太枠追加：増田

まず、現行の中学校学習指導要領において、①外国語教育の目標はCEFRを参考に行っているがそこにメディアーション活動を行う技能を育成する能力が含まれていないこと、②「授業は英語で行うことを基本とする」原則がこの指導要領で初めて記載され、日本語が補助的な存在となっていることを指摘しました。これらを踏まえ、指導要領改訂後に出题された昨年の入試問題におけるメディアーション問題の傾向を調査し（調査1）、続いて過去10年の入試問題について当該問題の出题率を調べました（調査2）。

調査1の結果、昨年の入試問題では、25道府県（53%）でメディアーション問題が出题されていました。問題の種類は、直接的問題（4種類）と間接的問題（5種類）に分けられました（問

題の一部：資料2）。指導要領に記載のなかったメディアーション活動を行う能力の評価が約半数の入試で実施されていることが判明しました。指導要領に記載のあった「授業は英語で行うことを基本とする」原則や補助的な日本語の役割の捉え方は、入試問題の全体に大きな影響を与えていると言えます。

【資料2】

**研究結果－調査1**

■直接的問題(4種類) Type 1～Type 4

Type 1: 下線部説明  
 (例)【鳥取県】下線部について、テックがこのような様子になったのはなぜですか。その理由を、それまでのテックのチームメンバーに対する態度をふまえて、40字以内の日本語で答えなさい(旺文社、2022, p. 219)。

Type 2: 特定部分の内容説明  
 (例)【埼玉県】本文1で、Ayakoは、自分たちの考えを他の部員たちに伝えようとするのはなぜだと述べていますか。日本語で書きなさい(旺文社、2022, p. 102)。

Type 3: 概要説明  
 (例)【青森県】次の文章は、ミホのスピーチの内容に関する生徒のメモです。スピーチの内容と合うように、「(ア)～(ウ)」に入る最も適切な日本語をそれぞれ書きなさい(旺文社、2022, p. 75)。

Type 4: 図表等への日本語挿入  
 (例)【山形県】表中のX～Zには、カナダ、イタリア、オーストラリアのいずれかの国名が入ります。対話の内容に照して、X～Zのそれぞれにあてはまる国名を、日本語で書きなさい(旺文社、2022, p. 87)。

調査2から、指導要領改訂の影響は少ないこと、メディアーション問題の出题は全国的に統一されていないことが明らかになりました。資料3はメディアーション問題の出题率です。当該問題の出题率は年々減少しています。2013年の出题を最後に、英文和訳や英単語和訳のメディアーション問題は出题されていません。高等学校旧学習指導要領を含む文部科学省の各種文書が一因となり、英語力強化への動きが加速化・意識化され、メディアーション問題が減少していると推測しました。

【資料3】

**研究結果－調査2**

■以下は、過去10年における直接的・間接的問題を含むメディアーション問題の出题率である。

2013～2017年	2013	2014	2015	2016	2017
メディアーション問題の出题率	89%	83%	74%	70%	66%
2018年～2022年	2018	2019	2020	2021	2022
メディアーション問題の出题率	64%	57%	57%	53%	53%

3

発表では、CEFRの参照、メディアーション活動への言及、母語の活用が見られるオーストラリア、イスラエル、イギリスの外国語教育のカリキュラムを紹介しました。我が国の入試問題で出题されているメディアーション問題は、

CEFR が説明しているメディアーション活動を行う能力を測っていると言えます。これまでの高校入試で測ってきたメディアーション能力は、将来、児童生徒が社会で駆使するコミュニケーション能力の一部です。発表では、次期指導要領にメディアーション能力を育成する目標を追加し、高校入試でも全国的にその能力を測ることを提案しました。

今後、対面での学会が再開され、皆さまと意見交換できる日を心待ちにしております。この度は研究の概要を発表できる機会を頂き、感謝申し上げます。



## ◇参加受付部からのご報告◇

報告者：加藤嘉津枝

(参加受付部部长・日本大学)

一昨年度、昨年度に引き続き今年度もオンライン開催となりましたが、185名からの参加申込みを頂き、大会当日を迎えました。大会の参加、すなわちコンテンツの視聴のためのログインなどが問題なくできるようにすることを参加受付部の主な任務として、大会実行委員長・副委員長、マルチメディア部、発表受付部、依頼発表部、学会事務局、大会事務局などの関係部署と連携しながら準備を行ってまいりました。

今年度初めて参加受付部長の任務を担い、不慣れな点が多く、参加申し込みのリマインドが申込期限の間際になってしまったり、不十分であったりしたため、ご関係の皆さまにはご迷惑をおかけいたしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

来年度もオンライン開催であることが決定しているため、こうした反省点が活かされるよう改善策を検討して次の大会をより良いものとするよう、努めてまいります。

最後になりましたが、2日間大会運営に携わっていただきました関係各所の皆さま、特に前年度受付部長の伊藤泰子先生、事務局の臼倉美里先生にはたいへんお世話になりました。改めて心より御礼申し上げます。

# 関東甲信越英語教育学会 第46回栃木研究大会（オンライン）プログラム一覧

12月10日（土）

On Demand	自由研究発表・実践報告
12:00 ~ 12:30	総会
13:00 ~ 13:10	開会行事
13:15 ~ 14:15	ワークショップ1 協賛企業動画配信
14:25 ~ 15:25	オンライン茶話会

12月11日（日）

On Demand	自由研究発表・実践報告
12:15 ~ 13:30	ワークショップ2 協賛企業動画配信
13:40 ~ 14:40	ワークショップ3 協賛企業動画配信
14:50 ~ 16:20	講演
16:20 ~ 16:30	閉会行事

## ◆協賛・広告掲載企業一覧

広告掲載企業	開隆堂出版株式会社 株式会社 金星堂 株式会社くろしお出版 株式会社 三省堂 株式会社新興出版社啓林館 株式会社大修館書店 東京書籍株式会社 特定非営利活動法人英語運用能力評価協会
広告動画放映企業	株式会社 金星堂 株式会社大修館書店 株式会社モリサワ 特定非営利活動法人英語運用能力評価協会
リンク掲載企業	開隆堂出版株式会社 株式会社 金星堂 株式会社くろしお出版 株式会社大修館書店 東京書籍株式会社 特定非営利活動法人英語運用能力評価協会 能登印刷株式会社

（掲載は50音順）

研究大会開催にあたりましては、上記のように、協賛を賜りました。  
ここに厚く御礼申し上げます。

## ◇全国英語教育学会 第47回北海道研究大会 授業研究フォーラム報告◇

日時：2022年8月6日・7日（土・日）  
場所：オンライン（Zoom）実施  
題目：「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた音声・文字指導の実践と検証」  
コーディネーター：加藤茂夫（新潟大学）  
発表者・報告者：入山満恵子（新潟大学）  
山下桂世子  
（英国 Ashbrook School）  
渡邊さくら  
（新潟県南魚沼市教育委員会）  
谷川美記子  
（新潟県新潟市立万代長嶺小学校）  
武石裕子  
（新潟県新潟市立石山中学校）

### 1. はじめに（加藤茂夫）

2020年度より小学校新学習指導要領が全面実施となり、5、6年生外国語（英語）の教科化に伴って英語の読み書きが正式に導入された。そうしたなか、英語の音と文字の学習・習得にむけた支援のあり方が模索されている。本フォーラムは、小・中学校現場における、特別支援・ユニバーサルデザインの視点を考慮した多感覚シンセティック・フォニックス指導の実践を紹介するとともに、対象児童・生徒の音韻認識効率等の経年変化について報告し、検討を加えることを目的とした。

### 2. 提案の概要

#### (1) 「日本語・英語の読み書きのシステムについて」（入山満恵子）

2012年の文部科学省の調査によると、通常学級に在籍する発達障がい児童生徒の割合は6.5%であり、そのうち4.5%は「学習が著しく困難」と示された。学習困難の背景は多様だが、調査後に実現した英語教育の早期化もあり、「英語」という新たな課題に直面している子どもたちの増加も危惧される。英語は日本語よりも音が細かく複雑で、また形状も類似したもの

が多く、特に認知の偏りがある子どもたちにとっては「機械的な反復学習」のみでの習得が難しい。本発表では、通常学級にも在籍している英語習得が難しい子どもの認知特性と、その要因となる日本語・英語の言語的な違いについて紹介する。そして、どのような指導法が子どもたちにとって有効なのか？という点を提案した。

#### (2) 「日本の英語教育における音声と文字の指導についての提案」（山下桂世子）

英語を母語とする英国では、2010年以降シンセティック・フォニックスの指導が全公立小中学校で開始された。シンセティック・フォニックスは英語の44個の音素をよく使用する文字（綴り）で表し、数個の音素と文字を習った時点でそれらをつなぎ（ブレンディング）、単語として読めるようにする指導法である。例えば、子どもたちはs, a, tの3音の文字を学習すれば、at, satと読める。これは、日本の小学校で「つ」「く」「し」の3文字を習った子どもたちが「くつ」「つくし」と読む過程と同じである。また、satという単語をs-a-tと3つの音に分解できる力（セグメンティング）も養うことで、単語を書くことができるようになる。このように子どもたちは音と文字の関係を理解し、それらを操作する力を養うことで「自分の力で」英単語の読み書きができるようになっていく。教室にいる多様な子どもたちがこの力を身に付けるためには記憶に残ることが必要であると考え、そこで多感覚を用いたジョリーフォニックスの実践を提案した。

#### (3) 「新潟県南魚沼市における指導実践プログラムの紹介」（渡邊さくら）

南魚沼市は新潟県南東部に位置する人口約5万人の自然豊かな市である。市内には昭和57年創設の国際大学（International University of Japan）があり、平成19年11月より「高等教育機関を活用した異文化理解特例校」に認定され、平成21年度より全市立小学校を指定し

全学年で「国際科」の授業を実施している。

「国際科」は、「英語教育」と「国際理解教育」で構成され、年間授業数は、1, 2 年生 10 時間、3, 4 年生 40 時間、5, 6 年生 75 時間である。

取り組む中でとりわけ課題として浮かび上がったのが、「小学校で音声を中心に学んだことが、中学校で音声から文字への学習に円滑に接続されていない」ことである。このことから、

「国際科」の指導の中で、系統的な読み書きの基礎となるジョリーフォニックスを用いたシンセティック・フォニックスの指導を、平成 28 年度より全市立小学校 5, 6 年生を対象に、令和元年度から全市立小学校 3 年生から 6 年生を対象として実施しており、その様子を紹介した。

#### (4) 「小学校における英語音声・文字指導の実践紹介」(谷川美記子)

読み書き等が困難な子どもたちにとって、外国語の授業は苦痛なものではないかと感じている。そのような子どもたちが意欲的に授業に参加できるよう、2 年生児童に UDL (Universal Design for Learning; 学びのユニバーサルデザイン) の視点を取り入れたジョリーフォニックスの指導を行った。多くの子どもたちが楽しく授業を受ける中で、自分の力で単語を読んだり、英語を聞き取ったりできるようになった。そのことが自信になり、外国語の授業にも意欲的に参加できるのではないかと考える。

#### (5) 「中学校における英語音声・文字指導の実践紹介」(武石裕子)

「楽しいけれど覚えられない。書くことは苦手」と話す生徒たちの支援の一つとして、今年度は中学校 1 年生で帯活動として毎時間ジョリーフォニックスに取り組んでいる。特に入学当初の 1 年生は「ローマ字と英語の違い」に戸惑い、そのため英単語は「丸暗記するもの」として捉えてしまう。中学校入学段階から 1 音ずつ多感覚を用いて丁寧に確認することで、すでに困難さを感じる生徒も安心して学習に取り組むことができるのではないかと考える。

#### (6) 「新潟県南魚沼市における実践と経年検証

#### 結果報告」(加藤茂夫)

最初に、小学校 5, 6 年生に在籍する新潟県南魚沼市の児童を指導群、新潟市の公立小学校児童を対照群とし、約半年間の多感覚シンセティック・フォニックス指導の有無が、児童の日本語・英語における音韻認識・操作効率に与える影響について検証を行った結果について報告した(加藤他, 2020)。

さらに、南魚沼市における指導有りの児童と、指導無しの 1 学年上の児童を対象として、それぞれ中学校卒業時に英語文法性判断および英語語彙課題を実施した。その結果、語彙課題において、指導群が 3 年経過後の語彙力で対照群を有意に上回った。

#### 3. まとめ

言語習得プロセスは音素や書記素の認識から語彙処理、文法処理、そして心的表象の構築に至るまで様々な階層から成り立っている。一方で、現在の英語教育ではいわゆる「4 技能 5 領域」における言語活動に過度に傾倒している傾向にあるのではないかと考える。本当に児童生徒が「英語がわかる」ようになる指導を行っているのだろうか。「聞いてわかる」「読んでわかる」ことの喜びや楽しさを保証しているのだろうか。本フォーラムでは、そうした自問から端を発した取り組みについて、とりわけ英語に苦手意識を持つ児童生徒が「聞ける／読める」喜びと、英語学習に対する自信の涵養に向けた支援のあり方を模索する実践を紹介した。参加者の皆さんから沢山の励ましやご指摘を頂き、取り組みを再度振り返る貴重な機会を頂いたことに感謝申し上げます。報告に代えたい。

#### 4. 引用文献

加藤茂夫・入山満恵子・山下桂世子・渡邊さくら(2020). 「ジョリーフォニックス指導効果検証の試み—新潟県南魚沼市の取り組みから—」『小学校英語教育学会誌』第 20 巻(第 1 号), 272-287 頁.

## ◇研究推進委員会報告◇

### 第 19 回 出張！英語教育何でも読書会

日時：2022年11月13日（日）10:00～12:00

場所：オンライン (Zoom) 開催

テーマ：「単語帳って必要？」

課題図書：中田達也 著 (2019) 『英単語学習の科学』 研究社

コーディネーター：砂田 緑

(東京学芸大学)

高木哲也

(筑波大学附属高等学校)

報告者：駒形知彦 (学習院中等科)

今回の読書会には「単語学習・指導」に関心を寄せる総勢 22 名の方々にご参加いただき、「英単語の学習」についての知見を学び議論が行われた。

最初に砂田先生、高木先生から課題図書の説明がなされた。まず「単語を覚える」とはどういうことかを確認し、その後単語の学習方法、テストの効果、さらには学習スケジュールや回数といった多角的な観点から英単語の習得についてご教授いただいた。その中で単語の習得はターゲット語や学習したい観点によって適した学習・指導の方法に一長一短があることや、学習者によって学習段階や学習スタイルは異なるため、様々な方法を組み合わせることが肝要であることが強調された。また、近年の研究から明らかになっている特に注目すべき内容として、以下のことをご紹介いただいた。それは①学習していない単語について事前テストをすることに学習効果があり、間違いを犯すことには効用があること、また②semantic clustering (意味的関連性) は必ずしも語彙学習を阻害しないということである。これらはこれまでになされてきた主張を覆すものであり、学習者や指導者はこれらの事実気づいていないことが多いと考えられている。今後新たに学習や指導に生かすことができる知見である。説明の最後にディスカッションの方向性として、単語は意味の習得

に留まらず、文の中でどのように使われるか、また英作文などの産出の場面でどのように活用できるかという側面を議論する必要があるということが確認された。

会の後半には、グループ及び全体でのディスカッションが行われた。まず自由に日頃から感じている点を共有し議論した。例えば単語帳を用いた学習は、単純に日本語に変換する学習で終始してしまうことや、学んだ単語を実際に活用する場面はその機会を待つしかなく、発表活動などを通して使用できるような機会は用意されていないといったことである。これを受けて、参加者の方々から単語帳の授業における活用方法をご紹介いただいた。ある参加者の方には、文章の中で単語を学習する単語帳を使用する際、文章をモデルとして使用し発表活動に繋げる取り組みをご紹介いただいた。また別の参加者の方からは同様の単語帳を使用した単語テストにおいて、単語の意味やスペリングだけでなく、内容の正誤問題、ターゲット語以外の機能語や共起語などもテストし、ターゲット語の理解がより深くなるよう実践されている例を共有していただいた。オンラインを活用した取り組みも紹介され、音声やイラストを用いて習得を促す方法にも関心を寄せる声が上がられた。単語に関する様々な側面を学ぶこと、さらには単語を実際に活用できるようになることに焦点をおいた実践が報告された。

語彙の習得に関してはまだ不明な点が多く、直観に反する研究結果が多く存在する一方で、語彙は言語の習得において根幹をなすものである。今回の読書会では近年明らかになった研究結果を学び、授業での取り組みを振り返り、悩み事を共有するなどしてより良い実践のために議論を行うことができた。私自身日頃からこのような読書会を通じて習得に関する知識を学び、学習者の手助けとなるために常に指導技術をアップデートする必要性を再確認した。

## ◇研修企画委員会報告◇

### 6月 月例研究会

日時：2022年6月25日（土）16:00～18:00

場所：オンライン（Zoom）開催

テーマ：「ICTを活用した英語授業実践—同期型と非同期型の取り組み事例—」  
発表者：小林 翔先生（大阪教育大学）  
田淵香奈子先生  
（大阪府立堺西高等学校）  
報告者：小林 翔先生（大阪教育大学）

子どもたちの可能性を広げるための場所である学校では、今や、PC 端末は、鉛筆やノートと並ぶスクールサプライの1つである。Society 5.0 時代に生きる子どもたちにとって、学校や家庭、社会のあらゆる場所で ICT の活用が日常となっている。そんな子どもたちが1日のほとんどの時間を過ごす学校では、まず、教師が一人1台端末環境における ICT の効果的な活用方法について、学ぶことが大切である。今回の発表では、小学校から大学までの各種教育機関での実践をベースに、ICT を活用した同期型と非同期型の海外交流を通して、学習者の情意面とスピーキング力の観点から、学習者の変容と実践の様子を報告した。



前半は、即興的な要素を取り入れた同期型の ICT に着目し、小・中・高校での活用だけでなく、大学での取り組みも発表した。また、実践報告では小学校と高校の授業で海外の学校とビ

デオ通話で繋がり、即興でやり取りする活動ができる「Mystery Skype (call)」を利用した海外交流について報告した。「Mystery Skype (call)」とは、オンライン上での国当てクイズである。教師以外の参加者には、相手がどこの国の生徒なのか知らされておらず、お互いに Yes/No question のみを使用し、相手の国を当てるといった目的を持たせた英語でのやり取りである。参加者が、自身の勤務校でも取り組めるよう、実際の授業の流れに沿って、事前学習として行った「世界の国調べ」や「模擬 mystery skype」、事後学習として行った「振り返りとアンケート」や「相手の国のことを調べる」までどのように行ったかを、実際のワークシートや授業の写真や動画を多く交えながら紹介した。

後半は、時差を気にすることなく、原稿を準備してから実施する非同期型の ICT に着目し、動画共有アプリ「Flip（マイクロソフトが提供する動画ベースの学習プラットフォーム）」を活用した継続的交流を扱った。1つ目は、海外の教室とつなげ、自己紹介や学校紹介、そしてそれぞれの国の名物をプレゼンテーションしたときの実践を報告した。2つ目は、生徒がそれぞれの家庭で行うことが出来る speaking 練習を取り上げた。参加者には、実際に高校生や教師がアップロードした動画を7本見てもらうことができた。3つ目は、教育大学の学生が模擬授業の様子を録画し、その動画をアップロードし、オンライン上で共有し、お互いにフィードバックをするという取り組みを紹介した。参加者も、百聞は一見に如かずと、具体的に ICT を活用した英語授業のイメージが湧いたようであった。

Zoom のブレイクアウトルーム機能を使い、参加者同士での話し合いの時間を2度行った。1度目は、「ICTを活用した同期型と非同期型とは？」を話し合ってもらい、2度目は「非同期型の実践紹介の中で取り上げられた『Flip』をどの様に使うとより有効か」について、話し合う時間を設けた。また、参加者の方々からの質

問は、「チャットボックス」を利用し、随時受け付けた。前半の同期型の ICT 活用の実践報告の際も、後半の非同期型の報告の際も、とても多くの質問及び、コメントが送られてきた。

## 10月 特別講演会

日時：2022年10月15日（土）16:00～18:00

場所：オンライン（Zoom）開催

共催：言語系学会連合・全国英語教育学会

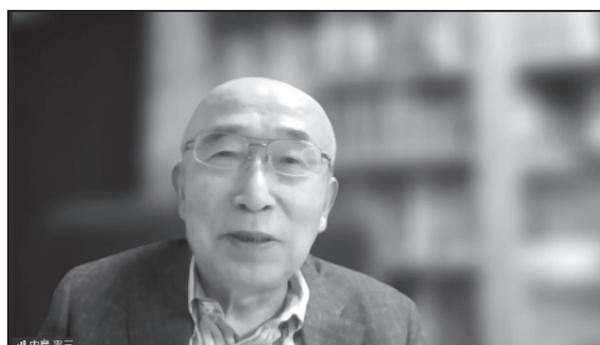
テーマ：「英語教育の“グッド・アンセスター”であるために」  
講演者・報告者：中島平三先生  
（東京都立大学名誉教授・日本英語学会元会長）

我が国の英語教育は実用主義に大きく傾いている。その傾向は、2017～19年改訂の学習指導要領で「何ができるようになるか」という大目標が掲げられ、その英語編（2018年告示）で技能科目の「ディベート・ディスカッション」「エッセイライティング」が創設され、とどまることをしらない。実用主義と対比される教養主義を含め、従来の英語教育は、既存の知識や技能（まとめて、「外在的知識」）を経験的に習得させることを目指している点で共通している。

だが、社会の「デジタル化」の趨勢は間違いなく教育にも影響を与え、特にメタバースやアバターの実体化や自動翻訳の精密化、AIの日進月歩などは、英語教育に多大な影響を及ぼすことが確実に予想される。これらの技術の精度が向上すればするほど教育の場における外在的知識の習得の意義は薄れていく。放置すれば、英語教育、教育全体の意義や存在自体が衰退してしまう。

東京高等師範学校の英語科主任・岡倉由三郎（1868–1936）は、英語学習には実用的価値とは別に教育的価値があり、また「現代外国語教育に関するユネスコ勧告」（1965）では、外国語学習の目的には実用的目的とは別に教育的目的があることを強調している。「教育的」とは、

英語を教えて学習者を人間らしく育てることである。そうした意義があるが故に、岡倉は従来の「英語教授法」という呼称を敢えて「英語教育」と改称することを提案したのである。教育的目的を目指すには、深い思考力、論理的な詰め方、一貫性のある議論の組み立てなど、柔軟で深みのある知性を育むことが重要である。こうした外からは見え難い知性を「内在的知識」と呼ぶとすれば、英語教育や教育全般を衰弱させないためには、探求型のアプローチで内在的知識の醸成を目指す英語教育へと転換していく必要がある。



探求型授業の具体例として、さまざまな形式の受動態を形成する<接木の原理>、その否定形や疑問形を作る<一目惚れの原則>、受動態の一見例外を例外としないための<見えぬけれどもあるんだよ>、無声音・有声音を日本語から探る<無声促音の規則>などを見た。

教育は国家百年の計。私たちが将来の子孫たちにとって英語教育のグッド・アンセスターであるためには、社会の趨勢を睨み長期的視野に立って望ましい方向性を、政界や産業界・経済界などに任せるのではなく、われわれ英語教師が一緒になって考え、そして行動していくことが必要である。

## 11月 月例研究会

日時：2022年11月26日（土）16:00～18:00

場所：オンライン (Zoom) 開催

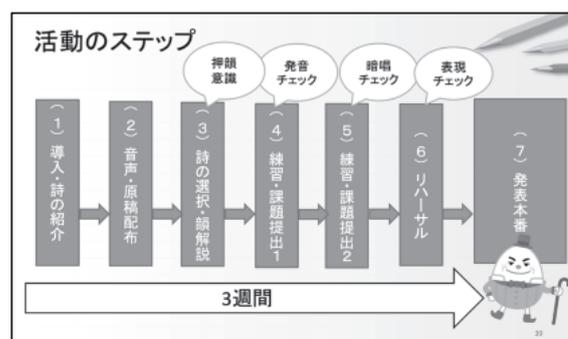
テーマ：「リーディング能力向上を目指すナーサリー・ライムの活用（小学校での実践から）」

発表者・報告者：細谷開世先生  
（学習院初等科非常勤講師・  
千葉大学大学院）

本勉強会では、小学校でのナーサリー・ライム活動を以下の通りご紹介しました。まず、新小学校学習指導要領で新たに加えられた「読み書き」指導において、「読むこと」の扱いと具体的な目標を確認しました。また学習指導要領、検定教科書におけるナーサリー・ライムを含む詩や歌の取扱いを概観しました。

英語圏では音韻、音素認識能力が後のリーディング能力を予測するものであるとされており、その能力を育てると言われるナーサリー・ライムの小学校英語における活用がもたらす可能性として次のような利点について触れました。繰り返し韻を踏んだフレーズに触れる中で、①音と綴りに意識を向ける機会となること、②意味のあるフレーズの音と文字に触れることで、文脈の中で意味を探り、推測する経験となること、③詩の背景にある文化や歴史に触れる機会を得ること、です。

今回取り上げた、6年1学期末に行われるナーサリー・ライム発表活動に向けて、3年1学期からアルファベットの読み書き、フォニックス指導、ロイロノートを活用した読み課題など、徐々に英語の読みへの意識づけをすることで「読むことができる！」と感じる体験を積み重ねていく、学年を超えた指導の流れをご紹介しました。中学年で歌として扱われることの多いナーサリー・ライム活動を、人前で歌うことに躊躇するようになる高学年の読みの活動とすることで、積み上げてきた力を、韻の助けを借り



ながら自身で認識する機会となることをご紹介しました。

本活動では、ジャンルや難易度の異なる8種類の詩を自由選択とし、押韻の明示的指導後、フィードバックを含む3週間の練習を経て、「自分の選んだ詩を観客に伝わるように表現する」ことを最終目標としました。児童がより良い発表のために、意味を正確に理解してジェスチャーを加え、英語らしい発音を目指す必要性に気づき、詩を細部まで意識しながら繰り返し読むことになるよう意図されています。最終の発表の accuracy, fluency, expression, attitude を3人の教員が総合的に判断して評価し、児童は振り返りシートを記入して活動を終わりました。

最後に、本活動の読む力への影響を確認するため、詩に含まれる単語単体で示された場合の読み、同じ単語が詩の中で読まれた場合の読み、同じフォニックスルールを持つ未習単語の読みの事前、事後テストを行った結果、有意差が認められたことを確認しました。また振り返りシートの記述に触れ、異なる読みのステージにいる児童がナーサリー・ライム活動を通して持った読みに対する意欲や感想を共有しました。ご参加の皆さまの、貴重なご質問ご意見から、今後の発展的活動への示唆を頂きました。

---

## 関東甲信越英語教育学会日誌

---

(2022年7月～2022年12月)

- 8月28日(日) 第3回運営委員会(14:00～17:00, オンライン開催)
- 10月9日(日) 第4回運営委員会(14:00～17:00, オンライン開催)
- 10月15日(土) 特別講演会(16:00～18:00, オンライン開催)  
共催: 言語系学会連合・全国英語教育学会  
テーマ: 「英語教育の“グッド・アンセスター”であるために」  
中島平三先生(東京都立大学名誉教授・日本英語学会元会長)
- 11月13日(日) 第19回出張!英語教育何でも読書会  
テーマ: 「単語帳って必要?」  
課題図書: 中田達也 著(2019)『英単語学習の科学』研究社  
コーディネーター: 砂田 緑(東京学芸大学)  
高木哲也(筑波大学附属高等学校)
- 11月26日(土) 11月月例会(16:00～18:00, オンライン開催)  
テーマ: 「リーディング能力向上を目指すナーサリー・ライムの活用(小学校での実践から)」  
細谷開世先生(学習院初等科非常勤講師・千葉大学大学院)
- 12月10日(土) 関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会(オンライン)総会  
(12:00～12:30, オンライン開催)
- 12月11日(日) 第5回運営委員会(10:00～11:30, オンライン開催)
- 12月10・11日 関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会(オンライン開催)  
(土・日)

表紙写真「関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会 宇都宮大学」, p. 8 「金子麻子先生の研究発表」, p. 9 「物井真一先生の研究発表」, p. 10 「山田敏幸先生の研究発表」, pp. 11-12 「高木哲也先生の研究発表」, p. 13 「佐藤 選先生の研究発表」, p. 14 「五十嵐美加先生の研究発表」, p. 15 「酒井英樹先生・福本優美子氏・森下みゆき氏・加藤由美子氏の研究発表」, p. 16 「海老原貴司氏の研究発表」, p. 17 「高橋 閑氏の研究発表」, p. 18 「増田瑞穂先生・松沢伸二先生の研究発表」, p. 24 「小林 翔先生・田淵香奈子先生の発表(6月月例研究会)」, p. 25 「中島平三先生の講演(10月特別講演会)」, p. 26 「細谷開世先生の発表(11月月例研究会)」

## 編集後記

- ◆本号は、関東甲信越英語教育学会第46回栃木研究大会を特集いたしました。開催方法はオンラインが継続され、大会2日間で延べ300名以上にご参加いただきました。昨年度に続き3つのワークショップに加え、初の試みとしてZoomによるオンライン茶話会が実施され、いずれも盛況でした。講演、42件の自由研究発表・実践報告も貴重な情報共有・意見交換の場となっていたように思います。ご発表者の皆さま、栃木県の先生方をはじめとする関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。また、特別講演会や月例研究会などに関しても講演者・発表者の方々にご寄稿いただきました。お忙しいところ誠にありがとうございました。当日のご参加が叶わなかった方々も、是非ご一読いただけますと幸いです。
- ◆編集委員も研究大会に参加し、多くの発表を拝見、拝聴いたしました。以下は編集委員の感想です。
  - ・今回KATE編集委員として初めて研究大会に参加させていただきました。様々な校種の先生方の発表やシンポジウムはとても興味深く、授業改善に向けてたくさんのヒントを頂くことができました。今大会で学んだことを、勤務校での指導や自分の研究に生かすことができるように精進していきたいとします。今後ともよろしく願いいたします。(S.I.)
  - ・オンラインでの開催ではありましたが、多くの発表を拝聴することができ、大変有意義な時間となりました。自分の興味のある分野から初めて触れる分野まで、幅広いジャンルのものを見聞きし、自分自身の視野を広げる素晴らしい機会となりました。今回得たことを、今後の私自身の授業実践等に活かしてまいりたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。(H.K.)
  - ・今回、KATEの編集委員として、初めて研究大会に参加させて頂きました。多くの方の実践・研究について拝聴させていただくとても貴重な機会だったのに加えて、初めての茶話会では最近の研究動向を踏まえて皆さまの関心をつなげる非常に有意義な時間を過ごすことができました。今後の私自身の研究に活かしていきたいとします。引き続き、よろしくお願いいたします。(Y.K.)
- ◆次号『KATE Newsletter』（2023年7月発行予定）は、「2022年度春季研修会」を特集の予定です。

2023年（令和5年）3月10日 No.117

発行者 関東甲信越英語教育学会 代表者 西垣知佳子（千葉大学）

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 臼倉美里

学会ホームページ <https://kate-jp.sakura.ne.jp/>

編集 関東甲信越英語教育学会編集委員会

〔委員長〕 森 好紳 (email: ymori@fc.hakuoh.ac.jp)

〔副委員長〕 田中菜採

〔編集委員〕 伊東 賢 小木曾智子 小野由香子 樫村祐志

神村幸蔵 工藤大奈 小室竜也 佐々木大和

鈴木健太郎 細田雅也 三上洋介 水書 亮